



注意！麻疹が流行しています

感染制御部

2014年に入ってから、4月16日までの麻疹累積報告数(国立感染症研究所発表)は274件となっており、既に昨年1年間の報告件数(232件)を上回っています。2007年から2008年にかけて麻疹の大流行があったことは記憶に新しいですが、今回の流行の特徴は海外、特にフィリピンで感染した症例が多いということです。

麻疹はWHOの分類でA～Hの8群、22遺伝子型に分類されており、2007年から2008年の大流行時にはD5株という日本の土着ウイルスが多く検出されました。このD5株ですが、実は2010年を最後に国内の麻疹患者からは分離されておらず“制圧”できたと考えられています。今回の流行で数多く検出されているのはB3株というこれまで国内では報告のなかったタイプです。2013年10月頃からフィリピンでの患者数が増加しており、この影響で渡航者からの輸入麻疹が増えているのです。

2014年2月以降は海外感染症例が減少し、国内感染症例が増加していますが、これは、一旦輸入例として入ってきた麻疹ウイルスが国内で流行しつつあることを示唆しています。

麻疹予防はワクチンで

輸入麻疹とはいえ、国内で接種しているワクチンで予防可能なのですが、2014年に入ってから報告を見ると(図1)、10歳未満が全患者数の44%を占め、その内の71%が麻疹ワクチン未接種者でした。もう少し詳しく見ると、0歳と1歳の感染者が最も多く、麻疹ワクチンの接種は1歳からということもあり、91%がワクチン未接種です。つまり、接種前の子どもたちが最も感染の脅威にさらされているのです。20代、30代の患者も多いのですが、ワクチン未接種と不明が76%となっています。1回のワクチン接種では次第に抗体価が低下するとされています。麻疹は未だ生命に関わることのある感染症であり、医療従事者において、2回の麻疹ワクチン接種(実際には麻疹風疹混合ワクチン)を受けていない方は自身の感染リスク回避や感染源にならないためにもワクチン接種が必要です。

阪大病院では、新規採用者の麻疹、風疹、水痘、ムンプス、B型肝炎の抗体価を測定し、抗体を持っていない職員に対してワクチン接種を無料で行っていきます。抗体価測定の結果が届きましたら、必ずワクチン接種の申し込みを行い、接種して下さい。

また、ゴールデンウィークで人の行き来が多くなり、例年この時期に国内でも患者数が増加しますので、発熱・発疹患者の来院時にはご注意ください。感染制御部のHPでも麻疹について説明していますのでご参照下さい。

お子様のワクチン忘れていませんか？

2014年1月現在、日本小児科学会が推奨するワクチンスケジュールでは麻疹ワクチンは第1期の1歳以上2歳未満と第2期の5歳以上7歳未満(小学校入学前の1年間)の2回接種となっています。厚生労働省が発表した平成24年度の麻疹風疹ワクチンの接種率は、第1期は全国で97.5%でしたが、第2期では93.7%と低下しています。2013年4月1日から施行された「麻しんに関する特定感染症予防指針」では、第1期と第2期の定期接種は95%以上の接種率を目標として、2015年度までに麻疹を排除し、世界保健機関(WHO)の認定を受けて、その後も排除状態を維持することを目標とすることが明示されています。職員の方で該当年齢のお子様がおられる方は麻疹風疹ワクチンを予定通り接種できているか今一度ご確認ください。

7. 年齢群別麻しん累積報告数割合 2014年 第1～15週(n=274)
Percentage of cumulative measles cases by age group from week 1 to week 15, 2014
(as of April 16, 2014).

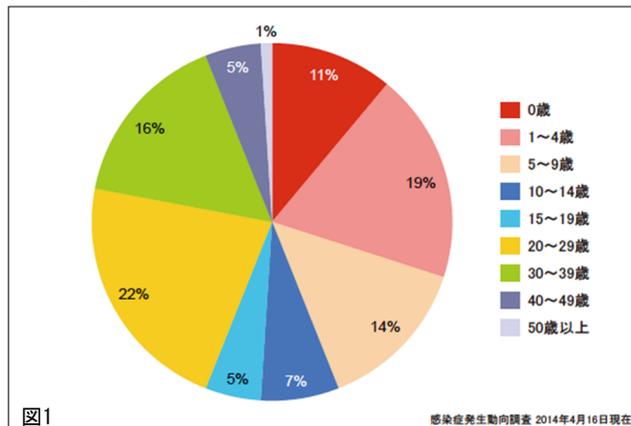


図1

感染症発生動向調査 2014年4月16日現在

平成26年度第1回院内感染対策研修会を下記の通り開催します。多数参加していただきますようお願いいたします。

テーマ：平成25年度院内感染対策のまとめ

日時：5月16日(金)

17:30～18:30

場所：医学部講義棟1階A講堂

きてね

